

# 両 TKA 後患者の中殿筋に着目し、デュシャンヌ歩行が軽減した症例

山口 潤紀<sup>1)</sup> 中村 真<sup>1)</sup>

1) 水無瀬病院 リハビリテーション部 理学療法科

Key words ; TKA, デュシャンヌ歩行

## 【背景と目的】

変形性膝関節症（以下膝 OA）患者において、右大腿脛骨角（以下 FTA）の増大は中殿筋の筋力低下・デュシャンヌ歩行を生じさせる一要因とされている。また、健常男性の歩行の安定性の獲得には、OKC のトレーニングの効果は限定的であり、CKC を含めたトレーニングが重要とされている。今回、術前よりデュシャンヌ歩行（以下 D 歩行）が出現していた右人工膝関節全置換術（以下 TKA）を施行した症例を担当した。本症例は術前より FTA の増大が認められており、TKA に対する理学療法に加え、CKC での中殿筋筋力強化練習を含めた介入を行った結果、跛行が軽減し、社会参加に繋がった症例を報告する。

患者には発表の説明を行い、発表に関する同意を得た。

## 【症例と介入】

80 歳代女性、既往として膝 OA があり、X-1 年に左 TKA を施行。1 年以上前より右膝関節の疼痛があり、X 日に右 TKA を施行。身長 147.2cm、体重 66.6kg、BMI30。術前の右 FTA は 193° であった。

初期評価（X 日+3~5 日）は、右膝関節荷重時疼痛 NRS 5/10。ROM(R/L°) 膝関節屈曲 75/130・伸展-5/0。徒手筋力検査（以下 MMT、R/L）中殿筋 2/2・大腿四頭筋 3/4・大殿筋 3/3。歩行器歩行では、上肢への依存が強く、左初期接地で踵接地は可能であったが、右膝関節軽度屈曲位、大腿四頭筋の筋収縮は乏しかった。体幹・股関節・足関節の可動域練習・中殿筋を含めた下肢筋力強化練習、荷重練習、低負荷の大腿四頭筋筋力強化練習を開始し、漸増的に負荷を高めた。歩行練習は平行棒内荷重練習から段階的に平行棒内歩行・歩行器歩行・杖歩行練習・独歩練習と進めた。術後 3 週目杖歩行練習開始時、術創部痛は消失していたが、術前同様 D 歩行は出現していた。術創部痛の消失が認められたため、CKC での外転筋筋力強化練習として、20cm 台を使用した骨盤挙上トレーニング・荷重位での重錘を使用した外転運動を開始した。

## 【経過及び結果】

術後 6 週目に跛行は軽減し屋外歩行を開始した。術後 7 週目に自宅退院し、外来リハビリへ移行した。最終評価（X 日+108 日）は、右膝関節荷重時疼痛 NRS 0/10。ROM(R/L°) 膝関節屈曲 125/130・伸展 0/0。MMT(R/L) 中殿筋 3/3・大腿四頭筋 4/4・大殿筋 3/3。D 歩行は軽減し、公共交通機関を利用した遠方への法事への参加が可能となり、外来リハビリを終了した。

## 【結論】

本症例は既往の膝 OA による内反変形により、FTA の増大と中殿筋の筋力低下が生じ、D 歩行が出現していたと考えた。TKA に対するプログラムに加え、中殿筋 CKC を含めたトレーニング、歩行練習を行ったことで D 歩行が軽減したのではないかと考えた。